

多感で、人間形成に重要な時期にある小学校高学年や中学生、高校生の入園者数が少ないことが気にかかる。だが、秋田大学附属中学校の校長を務めた経験から言わせてもらえば、これは仕方のない面もある。

規律や安全ということが叫ばれ、そういったものに縛られている子ども達は、かつての私たちのように、自分たちだけで自由に山や川、海に行くことは難しい。また、子ども達自身も積極的に外へ出ようとはしない。このような状況下にあつて、幼児期には親と連れだって、あるいは親に連れられて頻繁に動物園に足を運んでも、こうした年代の子ども達の足は動物園から遠のいてしまい、動物や命への関心も途切れてしまうのが現実である。一旦そうなってしまうと、小中学生に比べれば自由に外出できる高校生になってから「動物園に行ってみたら」と言われても、「動物(園)なんて、ダサい」ということになってしまう。

動物園は努力していると思う。先ほどからの話を聞いていてもそう感じる。だが、現実を変えていくということになれば、大森山公園の中に中高生が積極的に活用できる学習施設を作るというのも一案ではいかと思う。

秋田県には東北を代表する白神山地や鳥海山がある。また、秋田市には、野外活動も可能で、中学生でも4クラスが宿泊が可能な秋田市太平山自然学習センター「まんたらめ」もある。大森山動物園を核としながら、「まんたらめ」を活動の中心に、各図書館、男鹿水族館、白神山地、鳥海山などを太い線で結び、自然学習のための導線となる学習ラインを構築することを提案したい。

また、このラインには、約100年前に日本人として初めて南極の大自然に挑んだ白瀬^{のぶ}を記念した白瀬記念館を組み込むこともできる。

さらに、秋田駅に隣接している秋田拠点センター「アルヴェ」内の秋田市民交流プラザ内に設置され、人気施設となっている「自然科学学習館」の大自然版的な施設の設置も考えてもらいたい。この施設は、秋田県立博物館にはないか、あるいは手薄な部分である自然や地球の大自然を教材にしながら、現在の

生物の存在に深く、ダイナミックに関わってきた地質的・気候的な変化の様子を継続的に学習できる施設である必要がある。

なお、資金の問題については、国や近県からも協力を求めながら、大きなものとしてはどうか。

最後に、大森山動物園には、「動物が好きで、好きでたまならい」という飼育係が大勢おり、ある意味では、街の中よりも安全であるとも言える。どうか、小学生、中学生、高校生が前向きに訪れることができる動物園になってもらいたい。



【略歴】

1949年、長野県生まれ。広島大学大学院理学研究科博士課程植物学専攻修了、理学博士。1981年秋田大学助手、1990年から教授。2003年4月～2006年3月、秋田大学教育文化学部附属中学校長を兼務。

1985年11月～1987年3月、第27次南極地域観測隊員として南極で越冬。1988年11月～1989年3月、南極条約にもとづく文部省派遣交換科学者として、中華人民共和国長城基地で共同研究を行なう。カナダ、ハワイ、中国雲南省、韓国(濟州島)、フィンランド、北極圏のスピッツベルゲン島などで学術調査を行なう。

研究分野は、植物分類・生態学(特に日本及びアジア産地衣類の分類学的研究、南極産地衣類の分類・生態学的研究)。